911.3
サ

かの野ゑかきは画くまはせけに刻める
ものゝ形ちはいふに不及物のかたち魂ありて
来ゝ観する也深く他人の手本にも
わゝらして神佛のたましひハ狩野家も
更なり風友五体一日七のまゝにて画し
その外村画を志のゝむしらぬ新端ハ
ネーゝ画家の筆まよあしく向ひかたし

ともからけん破笠叟か作れる祖翁の
肖像を得てまさしく目にふれ仰くに
或通して是か秘蔵となれるを某か
かくて此の語らひを同盟に告て時雨の
句我もとめたれと文庫にをさめおくの
おもひをなすぬるや至て古今の名蹟を
とりあつめしくさや々とも名立る

学ふおもひも尚こゝに業婦也ともす
まひなるむ以ふ我序とす

安政二年十月

為維庵主人

拙識書

はせを忌各詠

けふばかり人も年よれ初しぐれ　芭蕉翁

網さらす松原ばかりしぐれ哉　素堂

あれきけと時雨来る夜の鐘の聲　其角

菜を煮てしぐれぬほどにやきさん　嵐雪

鳶の羽もかいつくろひぬ初しぐれ　去来

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　丈草

あはゝなミ迷ふ夜ハしくれかな　許六

志をれ株き又松風の岩杜の洩　北枝

むさきやる絹ふを着せ申し初しくれ　支考

押ゆくや霜月の夕しくれかな　野坡

帰鞍縁を掛て想ひき時雨菜　孤屋

しなてこそ壇患はけし嵐の馬　桃隣

衛ぬ人よりもまたゆかしく道　越人

淀ほとり京の年行しくれ哉　路通

初しくれはよく船敷の書をくり　杉風

ぬけ出しも茶院の僻の下時雨　曾良

見ぬ人の声能しくれけり　荷兮

船路の数は流るゝ如し迷ひ哉　嵐蘭

しくれさへ華ひらける船の船　千那

新庵の戸をあけてしくれ外　洒堂

梅塚の根の如る不振しくれ　史邦

芭蕉葉の落るを和せししくれ兎　此筋

ぬし逢まてしくれは日数かな　露沾

小松しくれ降へ出る傘の音　嵐葉

書棄の虫干に打ちつくしくれ哉　李由

しくるゝや黒木つむ屋の窓明り　凡兆

耳にゝのこる聲のまた暮も夕時雨　土芳

たゝひ行も何にかは野の初時雨　猿雖

鍋屋へうかゝりてみれはちらしくれけり　木節

牛島のなきみはぬれて時雨哉　浪化

下坂本三井寺こゝへしくれけれ　尚白

湖合に舩行のならしくれけれ　如行

降初ては木々の時雨の風　句空

鐘撞の杉振ふるしくれけり　正秀

馬かりて州田か里も行しくれ哉　乙州

暁の縫懐てしくれ逢な　木因

宇治木幡東へしくれてかゝる雲　曲翠

茅原の猿屋しかり初時雨　荊口

天地のきれしとゆるしてみれは　湖春
暁に茸の音きこしく寒けれは　似船
海山の骨を見せてやわしさ哉　勝力
新田に稗穀なとしられけれは　昌房
宋川岸てさくや秋田のかしさ哉　岸州
江戸桜いつとりけいりしてみれ　酒字
上り情のあとを出るかなる霞のあれ　游糸
めしかね程なゝくしてみれは上州の鹿　斜嶺

茗のきへは赤松石越してみれは　竹園
山ふかのき出かもみなしとみれは　野七
生ゝ神しき時雨ふもとや雲山　鬼貫
菊袖に折て何ゝあへしとみれは　雁越
稽まて拝のたるしてみれは　水國
萩葉先ぬ家もあり花の時雨　虎門
年押に出て反回きりにて時雨かな　野明
花に時見ゐ暁のゝしくみれは　来山

朴の木も伐にさへまじりしぐれけり　宇陀数

松茸をみしらぬ人の時雨けれ　三岐

炭やきの宿さへ借らんしぐれけり　如水

初しぐれ空から骨の折目かな　西吟

遊女はゆふまへ遠ひなから時雨　龍湖

一僕の持ち物寒しくれけり　安世

村しぐれ森見えぐれの目利けり　調和

新しぐれ松ありし玄関作　一笑

時雨にも果本々いかゞみる　才麿

淡井に鰹にいかならしぐれけり　言水

しぐれには作りのり眠く断続　轍子

鞍日もこぼれぬよりしぐれけり　休計

戸隠や尽の時雨の伊ちかな　素町

しぐれし空の岸や小森しぐれ　洞江

かれ日数檜行空しぐれけり　信徳

しぐれ八ツ坂の宿しぐれけり　牧童

馬ハぬれ牛ハ夕日の村しくれ　杜國
獅形の水呑井乃蒲也時雨　楪舟
白代をいそくやつし村しくれ　斗川
松笠の落るけりつゝもかしこしくれ哉　去虎
究竟の出替りの門出しくれ哉　落梧
汁海の船は撰出せしくれ哉　沾圃
ふきハ根にかへりはなしくれ哉　蔭松
初しくれ鍛戸の炭見て進は在家也　山店

暮もしくれ水に交る藪の初と　朱拙
衣着て又咄しかけりしくれ　嵐蘭
窓にさゝる山見しくれ哉　涼菟
柴焚も出むしくれの氣色けり　潤桃
初しくれ小鍋の芋の煮えかへん　可覚
時雨にも鍋のつり煮る峯の庵　擧白
是非もなくなかしくれ又霰かな　空芽
傘さして誰か宿とふ村しくれ　言水

物思ひに人の寝覚して初しくれ　舎羅

うつくしき森に入るや初時雨　秋色

児の親に笑はせなし置れは　夕霧

掛よしくれ筧の水の生て行　知足

釣鐘の下陰の音もしくれけり　竹五

石に置て香炉もぬらす時雨かな　野萩

しくれ来て鳥七ツの鐘の山越　汶村

松の中しくれ嫁のよめりかな　倹似

荒雲の行かたしれす時雨　蕪村

むら萩の淋しさかはるしくれ哉　宗踏

鐘むらの撞ではかなししくれけり　華因

柿の葉の物思ひ買りん初時雨　乙由

日はあかりに堀落ての縁しくれけり　秀子

山の雲に塩ぬれて松や初しくれ　青蘿

傘に化物見ゆる小夜しくれ　湖十

秋かえるかきりの山や初しくれ　涼袋

ゆふへより降かはりて小春しまで　探己

何人の旅姿や小春しぐれ　夢太

定まらぬ夜や鏡みかへるしぐれ　鶴口

郷まもる常みしのある時雨　年代

見し夢や時雨打粉の西うし紙　唐誰

めぐりは旅行衛と夜の雨か　支和

尼と御桁へ行しまつしぐれ　潤芝

婦の笑はかしまで雪まで時雨かな　暁柴

下もみず木もしぐれて須恵の名　古朗

業平は時雨の頃に取られけり　万世義

名の葉風の色変か何の時雨かな　秀雄

御しぐれ松の紅葉の音すさく　大江丸

春しぐれや枕の下はまくらかな　恒丸

しぐれも月の都の根はなし　桂堂

曙は宝所しぐれ秋しぐれ　几董

しぐれてや山婦の扉に来るしぐれ　乙二

桑の方を出て見るにしくれけり　成美
人の為しくれてたり佛けり　一茶
時雨来て又しくれ行夕かな　完来
松陰にたち給ふ道も見しくれけり　素檗
松の葉を[illegible]しくれて見しく人　葛三
寺町やしくれ晴れ作り紅葉の[illegible]　一瓢
[illegible]夢みて[illegible]紅葉けり　寿鵬
山里や霧の中[illegible]しくれ　寒松
扨山は鳥の巣[illegible]しくれけり　仙鶴
松陰の時雨にぬれし尾花哉　蕉年
菜畑[illegible]かなし紅葉哉　護芥
明星のあとにしくれ[illegible]けり　幼芝
無垢[illegible]しくれけり　米木
旅の[illegible]見るたる時雨かな　卅城
しくれても雲[illegible]　大梅
降[illegible]紅葉のうへ[illegible]けり　蒼虬

吹あれてうき雲ミなるしくれ哉　東池

稲かりて近ぬ瀬も直りし時雨哉　登朴

むらしきり藪にかゝるしくれ哉　護物

初しくれ嵐のつくやうに村しくれ　斗入

枝にふりよく来て月にはらしくれ哉　溶之

初しくれ人の来るゝ雨萩の葉　雄嶽

松かくに落葉おしかけに霰かれ　對山

先子立し様打つゝあしく近哉　鳳朗

木枯の下ふめきこゝしく近哉　法雲

あまりにむらつゝ来なしくれ哉　有月

しくれてや行くに出る千葉寺　葉鳩

降きつゝ池の底まておしくれ哉　何丸

むらしくれ篠立る竹に降りけり　粗文

浪枕めさまる夜をしくれかれ　折守

人昼て蛸んのかたしくれ哉　流芝

三日月に何かけまとうの初時雨　梅室

涼しさやしられぬ風おろす雲の峰　松什

しらさや月は東山にたる魚　遠潮

しる月やはつゝく元のかやしの山　琴風

色深し志らさて池のうき草　陵波

山里は一日妙をなましられけれ　向塘

つゝしく月近かへしくいつも枯ちる　蘇東

ゆかしく花陰は古きゆかし人の様　維州

秋の夜や時雨の雲の野あらしをなし　一具

其の頃はよしいかゞ芭蕉翁の肖像
冬近伴ふ衣子揃ひて誰いつ迄
つとひたる其の道を営むもの哉

守とくく名を恋のこれより初時雨　立休

物うしせうきなる山茶花の宿　得甚

秋のなる木を焼く大鍬の目をたてゝ　由誓
あまえ本すらひの蟬に冬の声　自夕
雲行は出並ふるなる月の雲　未足
出直してまた庭乃錦　亀遊
古き藤路礎に寝の名ちくなり　芽臺
翌は秋遠野を乞ふ小家野　如昇
若草出して春に鶉拾ふ烟哉　宋巷
傘は思ふところを傘の中　仕游
古き渡ら川の橋掛て　古淡
冬枯や鶴には寒し居る鴨　瓶水
霧深き中の晴る月明り　芙蓉
踊見に行旅先の月の夜　呂燕
近路に覚え姑姪の織出来　笑友
名護屋に便りに相油買ふ　雲篇
柿の実木の苔わきは取りても花の春　小州
尾藤の出作迷ひを拭ふ掌　桃珠

傍ちかみゝいつゝきさへ持て面ぬくふか　古笠
乃み為にとて両ゝ馬ゝつゝき　楽高
進くにふれる社乃力石　楽之
頭巾おこめ乃恋に離れ姫　松支
持いつゝ接抄ふりに鄙めきて　遊丁
きよらうに待し笛むしの紅　芦汀
象眼に針をさしぬれ縁うつ　妻丸
所まつ連去侍送る桃灯　知萍女

松陰に折くゝ中をおほれ汐さしかな　宜夕
所斗廣常が網のつくろひ　左凌
さまはすれに乾く生肉の旅衣　春来
太奈子借に行し後朱をこぼす　富木
若くさの江搞し筏の料理筆　宗玉
庫裏の修復の寄来ない屈　山雄
ふりく藤入まれさおきゝ肩のこり　松芽
きんちくうさゝかくさし書物　花谷

かきね笠成杖ものうちわかれ　栄古

今に涼さ茶の雪汁　来精

としころさゝえし翁の塚を書

柊にそふ是らは捨かた戴ける

申名新古うち変りぬ

木造の紋よくなるしお祝ひ　自庄

しなしや畑まで萎き桑とられ　李滕

名のありし山のはたあるし名残　雨后

霰ふ木の下降ぬある時雨かれ　一清

四ツ辻を四ツにわかれて知し道　松良

我得は海へまくまでし道なり　丘松

曲突の煙や魚残りし夕時雨　呂川

後方の水田に霰りくしれ　烏洙

しらうをも洗ふて細る枕の音　京 公成

竹の葉のいく枝つよし初しくれ　淡節

鶺鴒の尾にふりやまぬしくれかな　文翠

森をいま過し松もなくさめる時雨かな　漁藤

笠ふかく行ふ増山のしくれかな　有節

一嶺海山にかけし時雨との弟　林通

しくれもて竹にふたる雁の鴫　杜源

船の月に枕のしくるしくれかな　哲舎

竹の戸や帰らんとせし時雨かな　紫垂

ふりぬ田へ足跡見え残るしくれかな　鼎左

しくれしや伺ひの兄ゆゑ松も枝の葉　祇白

蒔餌にも雛子はしる時雨かな　林曹

晴れぬ池の奥をしくれかな　岸一

茶市の空み晴れぬ初しくれ　素原

船の中すみしかりしくれかな　曲阜

つくゑ傍の夜寒かなしくれかな　松隣

吹てみる心のつきぬ初しくれ　其雄

行つくは本の紛れて時雨かな　イセ 以さ保

山下りる人をかなしむしくれ雲　五鈴

後先によれは空見えて初しくれ　遊仙

雲ゐさき中やしくれのはしり雲　雅琴

嵯峨山やしくれを寝て床の声　アキ 甘香

山かれの雲行合て野のしくれ　フシミ 岳然

名残葉をさそひ落析や初時雨　祇来

眠りに時雨しかかり沖の鳥　アハ 風様

時雨来し筧の水を手向かな　思風

かたみなき深山も通ぬ時雨かな　羅桃

おめくくるさまく歩もく初しくれ　大夢

のほる日を押へし空の時雨かな　思壺

降くもを待て行やしくれ雲　樗宮

手廻しに門掃ておつしくれ哉　来岳

稀見ゆる時雨なりけり二三日　葉斎

しらかねや紫の書状のむすひめ　エキコ　好静

松ですら木目としくれ椿の内　乙良

時雨るゝや庵りの茶の間の結ひかれ置　菊山

湖の音に浦あれ也けり初しくれ　鷺城

なかなかにまたみなゆゑなる初時雨　素朗

一押にかゝるや峰にほとしくれ雲　千布

初しくれ二夜野を見えて菴に庵　卯自

細道の背なしくれはゝ陰ひけり　立宇

哀しくれもやさきのなりくゝ　ノ白　如鳥

ひとりゐていたしけし浦々初しくれ　經岳

鮮さしく時雨に落し鏡山　ヨク　呑雨

行先はかゝる雲は初しくれ　如雲

むかへは又としよる人えの時雨　一　多代女

我偏しくて眼先のふくさ時雨かな　清民

又けふもあり也しくれけり　老丹

降夜のよきかほるしくれかな　陳良

山寺や雲峯の岑のしくれ哉　麻支

晴ふ出し旅のこゝろや初時雨　謝笠

奥山の手深ひをさそふしくれ哉　義糸

黄昏にきのふの事も似て初しくれ　水明

来るら此に一峯残るしくれけり　友甫

行の見ゆる野へ向ひの村も初時雨　壺朗

見るうちに人は笑ふて初しくれ　交糸

晩鐘の耳にも入ぬしくれ哉　イヨ　宗雲

家袖の声おさまりししくれ哉　淡可

秋に来る人食のやかましくれ哉　上毛　要堂

精念をこらし時雨の宿の竹　未宝

日暮て古寺に居るのしくれ哉　竹烟

染かゝる錦の紅も初しくれ　心足

春遅花に降て山のしくれ哉　介尾

日にみゆる音も集る初時雨　壺樹

出し安くめくれかし塚の時雨哉　梅笠

紬ほす濡ゝ手のうへや初しくれ　眉山

籾ほすや立てしくれぬ傍の人　鶴秀

しくるゝや花咲草は見えなくし　宜夕

行月もしくるゝ宵の川そひは　木渕

しくるゝや細き麦蒔村みちの　石外

暮晴て野に思ひかへるしくれハ　菜数

鶏の啼やしくれの跡しおとしら　永石

嶺の出度まれハ同なきしくれハ　祖郷

志のゝめや水より時雨のかゝる傍　篤古

木の下は草ふかりしや初しくれ　花山

来る客の人まち侘て時雨の夜　成五

夕かより日もさす竹の遠時雨ふる　呉蝶

夜明の雲も露はしくれ初時雨　遠々

篁おちぬ椽や襖の初しくれ　和雲

しくるゝや檜乃中の翠檜　かの志

しくるゝやいふるハ鴨ぬ雀　仙庵

しくるゝと見えてハ日や丘の松　山子

斧操し人もしくるゝ木の下ハ　可角

うしろなく雨の夜路を知しられけり　自後

しくれ通る野中ミちの木を傳ふ　集

訪ひ来るしたしき人や暮る時雨　喜年

物くさき日の一日暮て物しくれ　老学

晩くれ生秋の寒ゆき時雨ハ　三幹

しくるゝや屋宗の井の一ツかゝり　玄子

落る日にわたり通しと降しくれかな　四端

山の尾根松のきまりしくれ通ハ、　星林

すしくれ緒生残宿めぐる夕しくれ　木管

あかなくも夜の更ても行初時雨　柏子

耕もやかましの杖山のしくれかな　楓路

咲先もしくれかゝる出かゝ　田鉉

鶏路しはしめ庵や物しくれ　友松

一年の後り松しくれもしくれかな　楓戴

芭二葉三葉先ちりて時雨けり　悠之

おりもをしきを払ひて松中に時雨かな　彼岡

しらぬまに小一里来つ松並　生布

出さむ心待ちたるにはれし時雨雲　當古

草々の枯葉落つくして寒哉　北貞

衣うつ入れ松に舞ひ行初しくれ　袁将

蓑笠を別條はなし時雨行く　交種

おしからぬつゆまき松の時雨かな　永壺

木の枝枯古葉は落ちし紅葉かな　砺山

芭蕉の花は今にちらし月夜哉　椋窓

西うけし目の峰のしくれ雲　如兎

幸しと庵に待うけし初しくれ　布丈

子を抱て木をも和らぐ初時雨　楊句

時雨来て老しきも家根の苔　蓬秋

しぐるゝや見え隠れなる磯の松　拾椎

秋の行も布しくれの手きぬひ　可大

しくるゝや蓑笠為る来る大新　波静
むらくに松見えて初しくれ　雲篇
むさむさの戸の外より来る時雨　土之
蜷しくる蓑笠に吉野時雨哉　素丸
鄙に住人も易し初しくれ　東窓
宿の眺出て来て降しくれ哉　古渓
降らぬ方の旅寝ぬれしくれ哉　海雄
藪畑にしくれ行も庁本日　山方

家出待も時雨見て居る宇治の宿　不滌
京に立人のぬれけりしくれ　英交
時雨行跡やむさむさと萩の声　龍水
しくるゝも山さまされて秋の雲　素壱
時雨るや来しこの見ゆかる底　谷一
ほぞの夜るにの中に降時雨　松支
我住ある夕の時雨かな　自夕
しくれきく徒も庵の古柏　古笠

下弦
町もりをいはゆる色のしるし哉　渢峯
旅人にわするゝのせるし道かな　旭扇
鯖にあまるなるのしくる行かな　得宜
海山にわするし富士の嶽　尼ノ
水に降るの静まきし道かな　月枠
舟つなく薪買つるしかれかな　二嶋
椎の木に横はつるしかな　人左
朝くや未にかゝるし道雲　見外

上弦
稲畑の家十ヶ計りし道なり　由儀
山葉畑はまこそあらん時雨哉　柏翠
下もりしかれ晴れの月の榧の木　角柾
蛸壺の畑つくろひあるしかな　守基
菖蒲けし木の葉の上を時雨かな　告高
曳きの紫藤の種に降る時雨哉　五英
落つの夜沖の浦や夕しるき哉　吉林
しらさぎや湊の船の日和待　冝山

鶺鴒や時雨ゐるきの森にたちし　完鶴

夕月や雲間見えつゝ初しくれ　此良

時雨して行雲物やしもの上　希藤

梢より一つふれて日の照しくれ　遠茶

柴垣に落てしくれて水の上　石禅

さしぬれてうすもみぢなる秋時雨　明衣

行雲に照る月のしくれ哉　汲古

山寺にそゝぐの森に葉落しくれ哉　一夢

しくれや音さしまぬ庭の雀　抱夢

人に笑きちらし紅葉の秋時雨　楓左

降明けて晴れ過ぎて早し時雨かな　清井

道行人もわくや時雨しくれ　芳雨

しくるゝや其の紀戸口の影月の　雲貢

雲のつらぬ樹の花ちりしくれ雪　椿衣

しくれて見え山に月に残る跡　如家

地に落る時雨かるゝや松の木　呉竹

まくらから枕子嬉し初しくれ　李郎

花ならり第目ならむ初しくれ　芳仙

村しくれ下ゝ木の葉ふく柿の色　物外

呼をとり出る音を手めるし初しくれ哉　素京

待ち来る友ある、何るし初しくれ哉　香以

日ハ月と成る見を加へ大時雨哉　花顔

起臥に年や五十也初しくれ　木鳴

猶り行世をの志しむ時雨哉　洲螺

今宵ふくや筆夜めぐり初時雨　羽雲

しくるゝや七ツ過けて旅る舟の棹　春陰

跡なしの葉人のときし初しくれ哉　蟻石

夕の月としく雲の庵哉　杉庵

笠ハまた仕舞はせ初しくれ　意松

水に浮く松のしくれ無成哉　義精

緑の青きて日か色くし初しくれ哉　一峰

友の問ふて目の友に寄ゐし初しくれ哉　芦雲

一荷ひて越也志て川の　和甫

小笹原たよりに出てしられけり　川游

葉のちる槙の戸さしかへる　露竹

物迄ての人のまへ也神の道　宗洞

様き折る雲に捨る也のしらし　重哉

光る盤木の緑めりけ神の時雨　好角

猿ともそ嬉しめたのしられけり　舞佐

しぐるゝ雁に手を扨て時雨　渓堂

時雨れの入来て青也山越しられ　山

晴るゝ空の杉面白し時雨うちに　季之

白露も見てとまりし紅葉　天由

来るゝ日中に紫紺の初時雨　弟之

行へも時雨の捨る初時雨　女後

しもて見る荷の光りし山の畑　三策

笠原也志のかしやしさの衣　杉虎

しまうて也屋根に拝囲ふ声　花朴

世にくらも嬉しもきも初しくれ　如鳳

はのみられ顔のうつ時雨るゝ山路かな　梅外

時雨降るの月の濡る淋しき梢の丸　ミサヤ 玉烏

菊うちらす吹く嵐時雨かな　東鳥

てらし遅時雨 野にらし花　越卅

さちらしに紅葉めあさえし遅雲　柳塘

降しきる寄しくれの荻芒　眉水

帰るさや人の来るや初しくれ　サツマ 馬翁

干てる藁に冷るしくれ哉　古河 左明

山の端しらくく雲に秋の月かな　菊暁

松風にしくれ遅く橋の月　一瑳

鼻よりくる耳時雨初しくれ　テハ 衛谷

はよりむ戸明る此ゆ初しくれ　緑山

池の水深くに流しゆつしくれ　角山

黒にあて稲刈秋の露　渓谷

しくれ行く紅葉寒かな　尾村

蔦先の下に春をかゝし花れ哉　月玄

影日にさゝのあれ見て秋しさ遅し　由故雄

つゝの秋く見やしされの二日月　恭示

絃めきて何を先に見るしされ哉　實霜　菊枝

芦吹や出る遅し雲に秋しさ遅し　文安

しめしや水出れても咲くさ夕吹　吉室

傘や新しく帝の花のしされ　梅雄

人まる春をまつしぬれて花の朝しさ　抱叔

此き笠に住吉花のしされ哉　珠吉

うちわむきて竹をきせや秋しさ遅　徒條

石藤の葉に春吹く見えね秋しされ　学宇

春の〆降つて行しさ遅哉　眉山

魚にもなきしれ年妹のしされ哉　信久

桐子ちむ何は浪やこそしさ遅　石丸　古池

咲きゝつゝ何と礼き雲も秋しされ　石雲

虫のゝ咲さね小庭や初時雨　酒憶

寒き菜に新夕の行するしぐれかな　樹石
枝ゝの空へ散く時雨かな森の鶯。　トサ 嵐夕
黄落て時雨十しぐれの夜あり　雲外
時雨るゝ夜檐の淋しく松の声　元史
大鏡の光久かけは吾夕時雨　鵜朱
しぐれても又紅葉ありし東山　アハヂ 墨窩
松に日のゆりてしぐるゝ夜嵐かな　十六 自之
如是行て且ふりしめの時雨かな　等栽

舟渡り船は夜船のしぐれかな　依琢
雲のかゝる日の雲に来てしぐれかな　ヒタチ 一松
しぐれ待夜しみ庵の枯薄　季川女
相一簇二三本残りて初しぐれ　芸角
屋の足洗ふ流も中しぐれ　五調
今までは星の見えしを一と時雨　伏尾
吹捨の松へゆりしぐれけり　ハリマ 十花
山足七時雨し花に離なる　菅麿

夕山やしら雲を離れぬ月のかけ　キイ 閑那
錦秋の紅葉の色をしくれ哉　越中 忠兮
山々の錦りも里にしられけり　似鏡
しくるゝや末の嵐も萩の原　石口
山里の夜さへ偸く数知られけり　守一
ひくらしてゝ時雨を誘ふの水　里遊
ゆのうちに止むや夜も長時雨雲　白実
古今の笠にかゝる初しくれ　慈遊

花芒のうねれし宮城野や初しくれ　素行
身をよせる宿の木末も時雨哉　立鶴
麦畑の秋へしくれ初しくれ　サカ井 琴頓
叢の家へ嵐の音も初しくれ　権陀
柞葉の照添へくしく時雨哉　笠友
入相にふりしきつゝる時雨かな　出羽 甫哉
山際の四方の時雨を見おろす亭　宗玉
眼の前の樹に雲しくしくれ哉　東洲

山と月ハ綿〻里にしくれけり　魁翁

しくれ去る夜のうちた山路坊　諾吟

川ありて篝の落出しくれ哉　一桃

雲寒き遠き山しくれ哉　アハ　蝶葉

きれ〳〵の雲ゆきなく時雨哉　大鵬

暮れしきれて浮る雲の名残　教行

しくるゝや風しける光る濱の庵　オカ　江三

木の葉まてしくれて落る時雨哉　南汀

見のこれる夕日にあたるしくれ哉　金波

帆かけの帆に来かりしくれ哉　ハリマ　州雄

寒きりしめらぬ宿に時雨　蓬玉

松風や耳持ちて初しくれ　イヨ　芦岬

夜あけさこのうきかさしくれ哉　呉雲

藪にしては時雨も狭も葉の蝶々　アハ　笑像

松並の朱ある山にも初しくれ　岐峰

しくるゝや別れして行浪の人〻　言山

稽田の若ミに霧るしたまへ　千之
庭出の虫しめり之中なしくれ　菊雄女
州しも末の眠る夜降し時雨哉　梅朱
老りわ年市のさまへ時雨けり　波文　二九八
常盤ミし海ぬ過るしくれ哉　遊字
野山まてつのるとの吹払しくれ　稲花
敷の内しくれてふかく木の葉哉　実伍
しくれとも海は満汐にむかひ日　松糸

鯨鳴川の細りも初しくれ哉　基悦
脱ミ松里へ当る都時雨かな　主松
しくれ嶂井戸たまる天気哉　藁丸
卅ふのふ降は過る我ぬ夜時雨　三光
若菰麗栗の葉は初しくれ初時雨　松節
しくれふ井ふ来るは見えけり　文生
老空は初めに見えて初しくれ　枝年
しくれも嵐の手子当の出波　琴好

声に梅しられの花は松を吹　去来

音ふかき隣へうきや初しくれ　一天

鶯の宿見えて庭うし通られ　画女　京山

しみるや何を見られて朱鷺の鳴　瓜生堂

金もなく寒山子に黒て初時雨　五出

鐘ひとつしる通の手に付て花　笑门

桐の実は落た見へて初時雨　安来

せりしあき中は十日の時雨哉　寿

鶯なる山やしられの庭のみそり　卜早

生鰹子し通り様の魔　スルカ　遠山

正夜立て魔はなうしく紅葉　桐古

柴籬の行けして行しられ哉　氏家　専什

唐科の赤き葉ちるや初しくれ　ムラ　友義

しみるや日は鶯飛き仲秋空　上毛　算市

去保通来て志なしくて降時雨　タ・ハ　九華

情年勝の松見せりて時雨哉　山竹

世の業のしるしみえて子ありけり　東枝

笠きた人のうしろ姿のしぐれけり　巴陵

しぐれ行人も梅ちる川の曲かな　来山

鉢たゝき並ぶ杉也初しぐれ　宮ノ宮 玄翼

ねぶとりに橋行月のしぐれけり　カヌマ 鹿妹

枯わたる蝶も鶯のなくしぐれかな　標紅

鴛鴦の塔に鳥かへるしぐれかな　芦汀

時雨しる我世の旅しぐれ紫　柏梢

水草に鷺一羽や初しぐれ　菜須

おもひけるうち峰も時雨の笠　梅峰

しぐるゝ七月の落るる山おろし　イセ 蕉雨

鶉の萌えあきしぐれけり　ハリマ 米石

木綾の高き木園に初しぐれ　ちくの也

時雨の木のみちる杉も初時雨　東棧

桑茸のかへらの見ゆる初時雨　萬木

野に川に流人渡し初しぐれけり　拙識

ひとりの角ハ和ならて初しられ　逐閑
薬師の子の孫めなりし初時面　枝素
ならく先の志つて逸なりならしられ　ノト　燧瓜
麦盤麋の萇もなきしられハ　十二八　柳ら
小佛の口で作なりし初しる道　ふ稍
石薬の葉ま書ハ青さならしられハ　朱佐
果見ゆる雲は果なきしかハ　如羿
降ならぬきのひより知返成時面ハ　白起

なりの宗で庭木動なきしられハ　洞人
地なきの庭の仕まも初なれ　太振
紫扇ハ声子の通てなしを道　つこミ　碑山
川まちハ霧のなりし初しられ　素牒
ひはをりつけなくなるし扇ハ　春峨
俳紅をなくにて出はしなれ　読虎
しるこ一文くに本の文字　すつせて　守逐
篇志なし後なりして時面なる　丁和

小為紀の明年乃出てゆしなれけれ　等臺

原中ハ人、事新きしく遣じ　對甫

枯野の移見之く出しなれハうれ　得蕉

拗しあれ兼に隠立けれ先なし　由誓

峯の果其の家見ゆるしあれけれ　五仙

梅さし見え九の霜かしや宗祇法師の世に

ふるの味をおもはへらせて祖翁も又つゝ

雨のふるにも宿を作らむあるの旅人と歩名

はせんと思ひし文人にあさゝゆきと依りし

其人の雅子もの意を再ひなさしの酒落

たへふ我もよしてる宿子祖翁の時のもの

句ある世を見置しの所うし流し趣のる

抑さきに出しゝ事は中にも元禄の俳士
其角嵐雪の輩の始めより又元禄もの
ありしに もからも其角に梓行出たる人よ
宜在に季寄なきを正して是を撰みあつめ
書しるしありし後の一集に此ひとつ編集の
心にまかせ よみ一言を芦水記す
ことはりに 淵艸の隠 周??書

昭和學園 短大
第6316號 受入
昭36.3.14